恐怖にのみこまれた戦争

読谷小学校　六年　二組　知花琉愛

私は、この戦争の話を聞いて、残酷だと思いました。ひいおばあちゃんから聞いた戦争の実体験を聞いて、もっと調べたいと思い、熱心に調べました。

戦争中、沖縄に来たアメリカ兵は、沖縄の住民をおそいました。そこで私は、沖縄の住民はガマの中でどう過ごしていたのか気になりました。沖縄には、シムクガマとチビチリガマがあります。

チビチリガマでは、「集団自決」というのがありました。アメリカ兵に殺されるよりは自分で死んだ方がよいと考え、命をたってしまった人が約85人いました。その場面では、母親が娘を切り付ける場面もありました。こう言った残酷な毎日が戦争中にありました。

一方、シムクガマでは、一千人の人たちが避難していて、チビチリガマであった、集団自決はなく、ハワイ帰りの男性が戦争で争を

ってはいけないと説得し、シムクがマにいた人は全員生き残りました。ですが、戦争中なので、不安と恐怖におそわれていました。

私は、実際にひいおばあちゃんに戦争中の様子を聞いたことがありました。おばあちゃんは、土に穴をほって過ごしていたと言っていました。穴の中にいた時、米でおかゆを作って食べたり、生き残るために、カタツムリや いもなども食べていたそうです。ですが、穴に入っていたとしても、人の足音、爆弾の音はひびき、人の耳に音は入っています。とても怖いとおっしゃっていました。その話を言っていた時、ひいおばあちゃんは悲しそうにしていました。

そして、ひいおばあちゃんは、まだ子どもの時です。なので、沖縄の子どもは何をしていたのかを調べてみました。子どもは、全部の学校の授業は停止され、ガリリンなどに使われる松の根っこ掘りをつかれながらもやっていたそうです。

私は、いろいろな記事を見たり、ひいおばあちゃんに話を聞いたりしました。話を思い出すと心が痛くなりました。戦争で悲惨なことをくり返してはいけません。戦争は住民をまきこみ、とても残酷な戦争になり、不安で恐怖で悲しい戦争をおこします。

今、戦争がない、平和でゆたかな暮らしをしている私たちですが、遺体がいまだに、見つかっていない人も大勢います。そこで、私ができることがないかを考えました。それは6月23日に今年も、次の年も、もくとうをつける習慣を身につけようと思いました。

KYOKUTO 20×20